

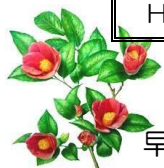


槻の若木

〒339-0054 岩槻区仲町1-14-35

電話：048-756-0254

FAX：048-758-7483

HP：<http://iwatsuki-j.saitama-city.ed.jp>Mail：iwatsuki-j@saitama-city.ed.jp

「なにが人の心を変える？」

校長 小林 成行

早いもので、2月(如月さつき)に入りました。今月は学年末テストもあります。また、3年生は公立高受検まであと一ヶ月となりました。それぞれの学年で、精一杯頑張ってくれるものと信じております。特に、風邪など引かぬよう注意してください。

さて、イジメ問題等が世間を騒がせております。そこで、今月は劇作家の木下順二氏(1914~2006)の民話劇『二十二夜待ち』を紹介します。木下氏の民話劇には、流れに身を任せ自分を見失っていた人物が、何かをきっかけにして真の自分に気づき、人間らしい生き方を取り戻していく内容のものがいくつかあります。その中の一つの話です。

ある村里のお堂で、村人達が馳走を持ち寄りて二十二夜待ち(月待ち講の一つで、満月の7日後、深夜に昇る月を待つ)の集まりをしていました。読経の後、飲めや歌えの会が始まった頃に、野武士の格好をした“ならず者”が飛び込んできました。そして、腕力と刀に物を言わせて怒鳴り散らし、村人達を脅します。



やがて村人は一人、二人とこっそり姿を消し、酔いが回ってきた頃には婆さま一人しか残っていません。そこへ孫息子の藤六(とうろく)が婆さまを迎えにやってきます。ならず者は、話し相手ができたとはばかり刀で脅して、一緒に泊まれと命令します。仕方なく泊まることにした藤六は、婆さまの寝床の準備をしたり、足をさすってやったりして世話をします。また「外の音が気になる」といえば、そのたびに起きて様子を見に出ていきます。婆さまの気持ちが落ち着くためなら、夜中でも起き出して行動する藤六を、ならず者は半分あきれ顔で“馬鹿”呼ばわりをしますが、だいに気持ちが動き「……なぜそれほどまでに」と問いかけます。藤六は「父母のいない自分がたった一人の身内を大事にしないでどうなる」と当たり前の顔で答えるのでした。やがて三人ともいつの間にか眠り込んでしまいました。朝です。すっかり酔いのさめた“ならず者”に、もう大声や空威張りはありません。何か深く考え込んでいる様子です。婆さまと藤六の様子は少しも変わりません。婆さまは「おら、何でも藤六がいいですよ」と藤六へ信頼と愛情を注ぎます。二人のやりとりをじっと見つめる“ならず者”の心が揺れ動きました。心の隅に押しやられていた肉親への愛、故郷への思いが込み上げてきて、心の底から熱くなってきました。



こんな気持ちは何年ぶりでしょう。故郷を飛び出してから、自分を自分以上に見せるため、虚勢を張って世の中を渡ってきたのです。それらが、まるで根雪が春の暖かさに溶けて流れていくように、勢いよく溶け出して流水となり、心の中を洗ってくれます。なんと心地よいのでしょうか。「さて、おらも戻るか……。久しぶりで親の顔が見とうなった。」ため息混じりの“ならず者”の声は、清々しさに満ちていました。

さてさて、なにが“ならず者”の心を変化させたのでしょうか。藤六や婆さまが特別のことはしたわけではありません。心の底から信頼しあった二人の真心と清らかさが“ならず者”の心を揺さぶり、失われつつあった自分自身の素直さを呼び戻させたのではないのでしょうか。私達は毎日の生活の中で、知らず知らずのうちに肩肘を張り、本当の自分を心の底にしまいこんで、仮の自分を前面に押し出してはいないのでしょうか。友だちや周りの人たちから注目されたいばかりに、心にもない冗談を言ったり、無理におどけて奇抜なことを行ったり、反対にわざと荒々しい言動を取ったりすることはないのでしょうか。いつの時代でも変わらない正しい人間観、正しい価値観とはどういう物でしょうか。それは、藤六のように自分の気持ちに素直に行動できる純粋な人間であり、物や地位では得られない、真心と清らかさにあるのではないかと思います。私達も、素直で純粋な人でありたいものですね!

